
ツンデレが好き！

ひるこ たつみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツンデレが好き！

【Nコード】

N1306D

【作者名】

ひるこ たつみ

【あらすじ】

“私が思うツンデレ”をひたすら垂れ流す、ツンデレ短編集です。

レナく金髪ツインの幼馴染みく

ピンポン

チャイムが鳴る。

僕は、ぼーっとしている頭を、なんとか回して玄関へと向かった。

ガチャ

ドアを開けた途端に11月の寒い空気が流れ込んでくる。

「ゴホッ……どちら様ですかぁ？」

「私よ。入るわね」

客人は僕の返事も待たずに、さっさと家に入ってしまう。

金のツインテールがやけに似合うこの客人は、幼馴染のレナだ。

レナとは小さい頃から一緒に遊んだ仲で、小学校の頃は6年間ずっと同じクラスだった。

でも、中学に入ってから、一緒にいることはほとんど無くなった。クラスが離れたのもあるだろう。

それに、女の子が、いつまでも男の子と一緒にいうわけにもいかなのは、その頃の僕にはわかっていた。

けれど、やっぱりちょっと寂しかったのを覚えてる。

それでも、何故かレナとは学校でちよくちよく顔を合わせる。

僕がF組でレナはA組だから、普通はあまり会わないと思うんだけど……。

もしかしたら、ダメダメな僕を、幼馴染のよしみで気にしてくれてるんだろうか？

「お台所借りるわよ」

「う、うん。それは良いけど……ゴホッ」

レナが台所で何やらガタガタとやっている。

勝手知ったるなんとやらって奴で、レナは僕の家的事は大抵わかっているから心配はない。

因みに、レナは料理上手だ。

と、いうか、レナは万能少女だ。

料理だけじゃなく、勉強、スポーツ、はては編み物まで。

しかも、どれも他の人に教える程の腕前だから凄い。

レナの凄いところはまだまだある。

顔はハーフなのもあってか綺麗に整っていて、とっても美人だし。

学校では生徒会長までやっている。

それに比べて僕は、料理もダメ、勉強もスポーツもダメ。

まあ、編み物だけはレナよりも得意なんだけど。

そんなのは何の役にも立たないのは充分わかってる。

顔は悪いとはいわないけど、良いとはとても言えないし。

生徒会どころか委員会にすら入っていない。

因みに、身長もレナの方がちょっとだけ高い。

丁度中学に入った辺りで抜かれてしまった。

「ちょっと、お塩が切れかかっているじゃない」

「あ、うん、ゴホッゴホッ…そ、そろそろ買わなきゃって思ったんだけど……」

うちは今両親がそろって海外に行ってしまったので、そういう買い物も自分でしなくてはいけない。

両親ともに外資系の企業で働いているので、こういう事はよくある。でも、あまり家事が得意じゃない僕は、結構こういうミスをすることが多いんだけどね。

あれ？レナが台所から出てきた。

レナは僕用のエプロンをつけていた。

レナがつけると、僕のだと思えないほど印象が変わるから不思議だ。

「あんた風邪ひいて学校休んだんでしょ？上で寝てなさいよ！」

「あ、うん……でも、ゴホッ…わ、わかったよ！わかったからそんな睨まないで……ゴホッ」

僕はなんだかやけに怒っているレナに逆らわずに、上で——上には僕のベッドがある——休むことにした。

な、なんで風邪で学校休んだの知ってたんだろ？

僕はそんな事を考えながら階段を上って行った。

コンコンッ

僕の部屋のドアがノックされたのはそれから少ししてからだった。

「あ、どうぞ……ゴホッ」

ガチャ

「は、入るわよ？」

レナは何故かちょっと緊張しているように見えた。
なんでだろ？

「あ、良い匂い」

「お、おじや。これなら食べれるでしょ？」

僕は上半身を起こして、レナが蓋を開けてくれた器を覗いてみた。

茶色の雑炊がホクホクと湯気を上げている。

ん、おいしそ。

レナは僕のベッドの横に座ると、おもむろにレンゲで雑炊を掬い、緊張した面持ちでそれを差し出してきた。

「ふう、ふう……は、はい。あ、あーん……」

「え、や、あの、一人で食べれるんだけど……ゴホッ」

「あ、わ、わかってるわよっ！ちよつとからかっただけじゃない！」

僕はちよつと顔を赤らめて断ったんだけど、レナの顔はもつと真っ赤だった。

なんとなく気まずくて、僕は黙っておじやを食べることにした。

チラッ、チラッ

ん？なにか視線を感じる……。

僕がレナの方を向くと、一瞬目があつたんだけど慌てて逸らされた。な、なんだろ……あつ

「あ、お、美味しいよ……？」

レナはその言葉を聞いて安心したのか、ほっと息を漏らしていた。でも僕の視線に気づいた途端にソップを向いてしまう。

「そ、そんなの当たり前でしょ。わ、私が作っただから……」

「そうだね、レナは昔から料理上手だもんね」

「そ、そうよ。だから私のことは気にしないで、さっさと食べないさいっ」

「う、うん」

僕はありがたくおじやを頂くことにした。

それから暫く、部屋には僕がおじやを食べる音だけが聞こえた。

僕がおじやを食べ終わるあたりで、レナが急に立ち上がって下に降りていった。

僕は不思議に思いながら最後の一口をパクツと口に入れた。

レナが戻ってくるまでには、さほど時間はかからなかった。

入ってきて、開けっ放しでいったドアを閉めたレナが持っていたのはプリンだった。

しかも、明らかに手作り。

「えっと、それは？」

「か、勘違いしないでよね！た、たまたま実習で余ったのを持ってただけなんだからっ」

レナはラップを外し、プラスチックのスプーンを添えて、ぶっきらぼうに差し出してきた。

実習では普通、一人一個しか作らないのは、突っ込まない方が良さそうだ。

僕は苦笑を浮かべて、素直にカップを受け取った。

プリンはとても美味しかった。

「ご馳走様でした」

全部食べ終わって手を合わせた。

レナはさっさと食器をまとめて下に降りていってしまう。

下で水が流れる音が聞こえてきた辺りで、携帯がメールの受信を、聞きなれた電子音で知らせてくる。

あれ、誰だろ？

メールを見ると、クラスの友達からだった。

『うっす！カゼ大丈夫かあ！？¥（。口¥）（ノ口。）ノなん
か、会長がプリン持つてお前を探してたから、風邪で休みだっ
て今日の分のプリント渡しといたからな（プリンとプリントを掛
けた高尚なギャグ、わかったかなあ？ノ笑） 今度、会長のプリン
の感想を教えるよな！（「」）ニヤリ』

あ、それで僕が風邪で休みだってわかったのか。

僕は、その時のレナを想像すると、ついつい顔がニヤケてしまった。
それにしても……プリントを受け取らなきゃいけないってことだよ
ね。

でも、このメールを見せたりしたら怒られる気がするし、そもそも
用事はもう済んだみたいだし、すぐに帰っちゃうだろうなあ……む、
難しい。

そんな事を考えているうちに、レナが食器を片づけて戻ってきた。

ガチャ

レナは何故かそわそわしながら腰を下した。

あれ？てつきりすぐに帰るのかと思ったんだけど。

まあ、都合はいいけどね。

「あ、あのさ……ゴホッ、えっと、今日は学校で連絡とか無かった
？」

「連絡？と、特にはなかったと思うけど……あ、そういえばプリン
ト預かってたわ！」

レナは慌てて鞆を開けて、中からプリントを探しだした。

その時、鞆の中に、何やら包装紙が見えた。

あれ？プレゼントかな……？

プレゼント……あつ、そういえば！
僕は慌ててカレンダーを見た。

——11月26日——

そうだ、今日は——

「あ、あつた。はい、これ。……？」

プリントを見つけて差し出したレナは、ベッドの奥でゴソゴソやってる僕を見て不思議そうに首を傾げた。

さて、僕は何をやっているのかというと……あ、あつた。
今日学校で渡そうとおもって鞆に入れてたんだつた。

僕は目的の物を取り出して、プリントを受け取ってから、改めて差し出した。

「はい。レナ、お誕生日おめでとう！」

そう、今日はレナの誕生日だ。

それでレナの様子がちょっとおかしかったのか。

なんか怒ってたり、緊張してたり、そわそわしてたり……。

「あ、ありがと。そ、そう言えば今日だったわね。すっかり忘れてたわ」

なんて、レナは平然を装って受け取ったけど。

他の人から貰ったプレゼントの包装紙、見えてたよとは言わないでおこう。

「あ、開けても良い？」

「うん、どうぞ。」

レナが、昨日の夜、僕が自分で包装したプレゼントを丁寧に開いていく。

中から出てきたのはピンクの毛糸で編んだ手袋。
僕の唯一の特技の編み物。

今回ののは我ながら、中々上手くいったと思う。

「び、ピンクって、子供っぽいわね」

「あ、あれ。ピンク好きじゃなかった？」

「ち、小さい頃とは違うのよ!」

レナはピンク好きだったと思ったんだけど。
どうやら気にいらなかったみたい。

「ご、ごめん。ゴホッ……い、いらなかったら置いていっていいよ。
母さんにでもあげるから……」

僕はしょんぼりとしてそういった。

「そ、そんな失礼な事するわけじゃない!せっかく作ってくれたんだから、い、一応貰っておくわよっ」

レナはそう言っ、ちょっと乱暴に手袋を鞆にしまった。

「え、でも——」

「い、いいのよ!……そ、それじゃあ帰るわ。……その、一応お礼は言っとくわね。……あ、ありがと……」

レナはボソボソとそんな事を呟くと、バツと立ち上がってドタバタ

と部屋を出ていつてしまった。

下で玄関のドアが閉まる音がする。

僕は溜息をついてから、外を覗いてみる。

「はぁ……プレゼント、喜んでくれなかったなあ……ゴホッ、あれ？」

レナがうちの玄関の前で靴をゴソゴソとやっていた。

家はすぐ隣りなんだから、探し物なら家でやればいいのに、なんて思っていた……。

レナがさっきの手袋を出すまでは。

レナは手袋を嵌めて、嬉しそうに手を見ていた。

そして、はっと二階を見たレナと目が合ってしまう。

ポンツと音が聞こえそうなくらい、一瞬で顔を紅葉色に染めたレナ。慌てて手を隠すようにしながら、レナはお隣へと駆け込んでいった。

僕はそんなレナの様子を見ながらクスクスと笑って。

クリスマスはマフラーにしようかな、なんて、計画を立てていた。

レナ、金髪ツインの幼馴染み（後書き）

ん……今回はツンが弱かった、かな？
なんて思っているひるこです^^

いかがでしたか？

私が衝動に駆られて書いたツンデレ娘はwww

今後もupを継続していけるよう頑張りますので、
宜しくお願いします！

キョーコ、強気な格闘娘、1

「ちょっと、近づかないでよ！」

「んなこと言っただけでしかたねえだろ!？」

「手錠で繋がれてんだから！」

突然だが、今俺は危機的状況にある。

どのくらいの危機かというと、もう、命すら危ない程の危機だ。なんせ、今俺はキョーコと手錠で繋がれてるんだ、いつ殺されてもおかしくない——その場合犯人は十中八九、今俺の隣でキーキー言ってるのが犯人で間違いない。

キョーコはある道場の跡取り娘で、天童白河流とかいう空手だか少林寺だか合気道だかの武術の使い手だ。

その手と脚で、沈めた男は数知れず。

まあ、その半分近くはナンパ目的で近づいた奴らなんだけどな。

キョーコの奴見てくれだけは良いからなあ。

最近、短く切った髪がまた良く似合ってるんだ、これが。

それに引き締まった体に、小顔でキリツと爽やかな目鼻口。

まさに運動少女？

萌えだよな、萌え。

ま、中身がこいつでないなら、だが。

キョーコとの出会いは、まさに衝撃だった。

あれは高校に入学してまもなくの事だ。

俺は地元の中学じゃそこそ有名な悪で、腕っ節にはかなりの自信があった。

そんな俺がまだ馴れない道を頑張って登校してた時、ふと視界に茶髪だの金髪だのピアスなんか開けてる、いかにも調子にのってる

奴らが群れをなして歩いてるのが見えた。

実のところ、俺はそういうチャラチャラした奴らが大嫌いだ。そこで俺は喧嘩をふっかける口実を探してたんだが……。

「ねえねえ、君可愛いね、新人生？ 俺達サッカー部なんだけどさ、マナージャーとかやってみない？」

「私は部活に入るつもりなんてないですし、あなた達みたいにチャラついた人がいるような部ならなおさらです。どこかへ行ってください。」

「毒舌だなあ。そんな事言わないで見学だけでもしてみてよ。あ、そうだ、メアド教えてよ。そしたら、練習日とか教えられるし、ね？」

探すまでも無かった。

群れは一人の女生徒を中心に歩いていた。

しかも、その女生徒は嫌がつている——やけに強気だったが。奴らをボコれて、そのうえあんな美人に恩を売れる。

最高の状況だと思ったね、俺は。

それで俺は意気揚々と近づいて、一番後ろにいた奴の肩に手をかけて喧嘩をふっかけようとした、その時。

カチャ、カン、カン、カ……

一瞬空気が凍ったね。

どうやら女生徒が、リーダー格の男が出してきた携帯を弾いたらしい。

それで、今携帯はその女生徒の足元に落ちてるわけだが……。

バキッ、ガチャッ

躊躇いなく踏みつけやがった。

しかも、その後ぐりつと踏み蹴ったぞ、あいつ。

俺はその行動に思わず口笛を吹きそうになったね。

けれど、奴らがそんな女生徒を許すわけもない。

いきなり態度を豹変させて、女生徒の胸倉を掴んで——羨ましい事しやがつて！——腕を振り上げた。

「テメエ、ちよつと面が良いからつてチョーシこいてんじゃ、ねえよ！」

その声と同時に振り下ろされた拳。

しまった！ あの女の天晴な行動に見惚れてて、動くのが遅れた、間に合わねえ！

しかし、そんな必要はこれっぽっちも必要なかった。

次の瞬間にのされてたのは、その男だったからだ。

どの男つて、拳を振り下ろした奴だよ。

え？　なんでそうなったのかって？

そんなの決まってる。

その女が拳をひらりと避けて、回し蹴りを男の後頭部に叩き込んでたからだ。

俺の記憶では、あの男は最後まで起き上がらなかったな。

まあ、ニユースになってないところを見ると、死んじやいないんだろうが。

さて、そんな見事な蹴りを見せられて俺は久々に興奮したね。

しかも、その群れの残党も全員一瞬でやられてた。

俺はこいつとは気が合いそうだと思ったね。

なんせ、奴らの屍——死んじやいないが——を見下して——

「どうせ、あなた達みないな連中は他の生徒にも迷惑をかけているんでしょ。これを天罰だと思って、今後は行動を改めることね。特にその髪とピアス、それからそのだらしない服装もなんとかしたら

？」

——とか言いやがった。

まさに共感。

俺は思わず話しかけた。

もう、感動と興奮で胸を高鳴らせてだ。

「よう、やるじゃん、お前。実は俺もこいつら——」

「まだ仲間がいたのね！」

ドゴッ

俺は一瞬意識を失いかけたね。

この俺が一撃で意識を失いかけるなんて、初めてのことだ。

何があつたのかを把握したのは、その一撃で失いかけた意識を必死で堪えきってからだった。

クラクラする頭……痛い。

ああ、俺もさっきの奴みたいに回し蹴りを側頭部——さっきの奴は後頭部だったが——にくらったんだ。

でも、何でだ？

「あら、なかなかしぶといのね。」

俺が聞いた最後の声だった。

次の瞬間には鳩尾に強い衝撃を受けて俺は意識を手放していた。

俺が目を覚めたのはそれから数時間後だった。

目覚めた時、俺は保健室のベッドの上だった。

カーテンで区切られた、その空間で、俺は事態を把握するために思考を開始した。

ま、考えるまでもなく、俺は被害者だろうな。

最後に「仲間」とか言ってたから、大方あのサッカー部とかいう奴らの仲間だとも思われたんだろうな。

とんでもない女だ。

状況も確認せずに、無差別に攻撃するとは。

でも、不思議と怒りは湧いてこなかった。

むしろ、興味の方が強かった。

「あの女何者だよ！」

そう、ズバリ……って今の声は俺じゃないぞ？

さらに続く声は別の奴だ。

「チョーシ乗りやがって。ただじゃおかねえ！」

ああ、この声、さっきの……。

そうか、あいつらも一応生徒だもんな、登校中——しかも、あの場所
は学校の目と鼻の先だ——に怪我したら保健室行きだよな。

それにしても、こんな物騒な会話が普通に行われてるのを見ると保
険医はいないらしいな。

「おい、仲間集める。さっきの女、帰りにやっちまうぞ」

「お、いいねえ。じゃあ俺ケンゴ達に電話してみるわ」

待て、それはまずいな。

あの女、のされた俺が言う事じゃない気がするが、そこまで強くない。

力がそこまであるわけでもないし、油断せず、やろうと思ってやれば
10回中10回勝つ自信がある。

ただ単に、闘い方と人体の構造を知っているってだけだ。

あの時は全員油断してたから簡単に倒せたけど。
あいつらが油断せず、力と数でこられたら、あの女、ひとたまりもないぞ。

「あ、もしもし、俺だけ——」

バキヤッ

俺は気付いた時にはカーテンから飛び出して携帯を蹴り飛ばしていた。
た。

頭ごと蹴っちまったから、電話してた奴はまた気絶しちまった。
慌てて立ち上がるサッカー部連中。

「てめつ、何しやがる!？」

「つてかぶつ殺すぞ、ああ!？」

いかにも頭の悪そうなセリフだな。

ま、俺にはよく馴染みのある雰囲気ではあるが。

俺の胸倉を掴んだのは、最初にのびたリーダー格の奴だ。

「なんだ、最初にやられた奴じゃねえか。まだ懲りてねえのか？」

「つてめ! ぜつてえ殺す! オラアッ!」

繰り出される拳。

やはり、力だけなら、あの女には勝ち目はあるまい。

あの女には、だけどな。

その拳をバシッと受け止め、思いつき握ってやった。

「誰が、誰を、殺すつて? ああ?」

「が、いた、いたたた、は、離せ! テメエ、いてえつつつてんだ

ろうが！」

あまりの激痛でか顔を歪めて俺に蹴りを入れようとする男。周りの奴らは、何が起こってんのかもわからないみたいで、戸惑って動きやしない。

俺は男が蹴りをいれようとした瞬間に、軸足を軽く蹴ってやった。ただ、それだけで男は面白いようにケツからこけた。

俺はそいつを見下してから、周りの奴らを睨んで威嚇して、もう一度、リーダー格の男を見下した。

「お前らよお、さっきの女に手え出すの止めろや」

「ああ？ 何言ってんだ。テメエにや関係ねえだろうが！」

そう、確かに俺には関係ないのかもしれない。

でも、俺は気になっちまったんだ。

なら仕方ねえだろ。

「関係？ ああ、ないな。けどよ、そんな事はどうだっていいんだよ。俺が止めろって言ったら止めりゃあいいいんだ」

「っザケンナ！ ぶっ殺すぞ！？」

変わり映えないセリフ。

俺は溜息一つ溢してから、奴らに『教育的指導』ってのをしてやることにした。

それから数分後には、その場にいた殆どの奴が半殺しになっていた。流石の俺も何発か貰っちゃったけど、完全に俺の勝ちなのは明白だろう。

俺は虫の息のサッカー部共を見渡してこう言っちゃった。

「てめえら、次あの女に手を出したら、こんなんじゃすまさねえぞ

！？」

——パタパタパタ……

足音？

誰かが騒ぎを聞きつけたか。

俺は先公が来る前にとんずらを決めた。

それから数日様子を見ていたが、奴らがあの女を襲うことは無かった。

流石に懲りたと見える。

あの女はどうやら俺のクラスだったらしい。

今までまともにクラスの連中なんて見てなかったからなあ。

全然気付かなかった。

それを知ったのはあの事件の次の日だ。

俺がいつものように教室に入った途端にあの女が目に入ってきた。

俺は一瞬硬直したが、別に怒っているわけでもないの、さっさと自分の席につくことにした。

あの後で、よくよく考えてみたら、あのタイミングであんな出方をしたら誤解されてもおかしくないしな。

俺は席につくと、いつものように突っ伏して眠ろうとした。

「ね、ねえ。ちょっと、あんだ」

いきなり俺の頭の上から声が降ってきやがった。

俺はめんどくさげに頭を上げた。

相手があの女だったのはわかっていたんだが、それでもなんとなくそんな態度をとってしまった。

そんな態度が気に食わなかったのか、口調がちよっとキツくなった。

「あんたよ、あんた。昨日の喧嘩の時、あんた、いたでしょ?」
「ああ? いたけどそれがどうしたんだよ。」

どうせこいつはサッカー部の仲間とか勘違いしてやがるんだ、どうせわけのわからない事をほざくんだろうと、俺は聞き流すつもりでいた。

誤解をとくのも面倒だったしな。
でも、返ってきた言葉は意外なものだった。

「そ、その……い、いきなり蹴ったりしちゃって、わ、悪かったわね。」

「……は?」

俺はあまりの事にバカみたいな声を出してしまった。

女は赤い顔を逸らして続けた。

「だ、だから悪かったって言ったのよ! あんたは関係なかったってミヨから聞いたの!」

ああ、それでか。あれが誤解だったって気づいたわけだ。
たぶんミヨってのは、教室の前の方でこっちに向いてウンウンと頷いてる女だろう。

まあ、あの時にでも、たまたま一部始終を見ていたんだろうな。

俺はなんとなく気恥ずかしくて、やはり、どうでもいいという風にぞんざいに答えた。

「ああ、いいよ、んなこと。謝ってる暇があったら、少しは男のかわし方くらい学べよな。」

「な、わ、私だって謝りたくて謝ってんじゃないわよ! ミヨがどうしても謝れっていうから仕方なくて!」

女は赤かった顔をさらに真っ赤に染めて叫んだ。
その声にクラス中がこっちに注目したが、俺が一睨みしたらすぐに視線を逸らした。

そんな俺の様子を見ていた女が目を吊り上げて俺を責める。

「あんたがいつもそういう事ばかりやってるから誤解されるのよ！　そうよ、日頃の行いが悪いんだから、天罰だわ！」

「きよ、キョーコお！」

流石に言いすぎだと思ったのが、ミヨらしき女が女を止めた。

俺は女の言葉には特に怒りを覚えず、「そうか、キョーコって名前なのか」なんてぼんやりと考えていた。

キョーコも、しまったと思ったのだろう。

俯いて黙り込んでしまう。

……いつまでもいられても邪魔だな。

「……で、キョーコちゃんとやらは、結局何が言いたかったんだ？　あれは俺が悪かったんだから反省しなさいとでも？」

こっというタイプを動かすには挑発が一番だ。

目論見通り、キョーコは林檎みたいな顔で――

「だ、だから……最初に言ったでしょ。そ、その……ごめんなさいって」

徐々に声が小さくなっていくので、最後の方はよく聞こえなかったが、謝っているのはわかった。

それでも俺はわざと意地悪く言ってしまった。

「ああ？ 聞こえないんだけど？」

「だ、だから、こめんなさいって言ってるのよ！ 何度も言わせないでよ、バカ！……！」

「あ、キョーコ！ 待ってよお！」

言いたい事を散々言って、キョーコは自分の席に戻ってしまった。

ミヨがその後を慌てて追い掛けていく。

俺はさっきのキョーコの真っ赤な顔を思い出して吹き出しそうになるのを、突っ伏して堪えた。

やっぱりあいつは面白いな。

キョーコ 強気な格闘娘 1 (後書き)

短編集なのに連載ものです^^;

まあ、垂れ流し作品なんで良いかなあ、と。
後悔はしていません(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1306d/>

ツンデレが好き！

2011年1月25日15時55分発行